

第2回高槻中学・高校AL公開研究会報告 「クラス作りとAL」 & 「高槻の三者懇談」

【1】クラス作りとAL

今まで、ALの話をしてきました。それは、学習や授業という分野での話でした。ところが、今回の研究会で、関西大学の森先生の報告に、一風変わった報告がありました。それが、

深い理解を支えるクラスづくりの重要性－生徒同士のラベル貼りを超えるには－

です。ALを実践する際に「クラス作り」という観点が必要だという指摘です。なぜか？それは、今までの講義型授業では、授業時間は、「教師が統制をしていた」からです。ところが、ALの授業では、生徒が主体的に活動する場面が多分にあります。ということは、その活動に「クラスの間関係が反映される」ということが、多分に起こるわけです。それを森先生は、次のように表現しています。

授業外で生じた社会の諸問題を持ち込む

⇒思春期特有の授業外の間関係と評価を授業に持ち込む

これを「ラベリング」というらしい。わかりやすく言うと、「レッテル貼り」です。高槻のような進学校では、そのレッテル貼りの最たるものが「学力」になると森先生は言います。

覚えておられるでしょうか？昨年度の第1回の高槻高校のAL研究会の報告で「フリーライダー」の話を紹介したことを。「フリーライダー」とは、経済用語で「自分はあまり何もせず、利益を得る者」のような意味で使われます。ALによる「フリーライダー」とは、「グループ活動に積極的に関わらず、周りの意見を聞いている生徒」というイメージになります。

そこで、こんな事例を森先生が紹介しました。国語の授業での生徒の活動の様子を示したものです。6月6日に

生徒A	生徒B	生徒C
主張	主張	主張
		促し
主張	承認	
	主張	主張
		促し
承認	確認	承認
	比較的批判	
拡張	並置	
承認		比較的批判
中断		

森先生が授業見学をしたときの活動の記録です。このときの生徒Cの様子が、「フリーライダーになっていた」と森先生は指摘していました。どんな様子であったかという、

- 「どうぞ」
- 「はい」
- 「団長というよりかおばあさんが…（聞き取れない）」
- というようなものです。また、行動も
- 「前のAとBに発言を促すように手を差し出す」
- 「相関図を見ながらシャーペンで机をたたく」
- 「話すのをやめる」
- 「頬杖ついて二人を見ている」

というような内容で、積極的に話し合いに参加していません。結局、このグループは、最後には話し合いを中断してしまいうということになってしまいました。

ところが、担任の先生の適切なクラス経営によって、この生徒

タイプ	人数	イメージ
下降	3	
ジグザグ	10	
しり上がり	12	
夏休み	6	
平行	11	
山型	2	

Cのような生徒が、活発にグループワークに参加する、深い学びをするようになると森先生は言います。生徒のタイプには、いろいろなタイプがあって、それを示したのが、左の図です。この生徒Cは、しり上がりタイプの生徒ということでした。

森先生が、良いクラスとは何かを次のように定義しています。

良いクラスとは、

- ・ 安心・安全な場所
- ・ 教師との信頼関係の構築
- ・ クラスメイト同士との信頼関係の構築

このようなクラス作りがALと同時に行われると、ALが活性化し、「深い学び」につながります。

事例で紹介されたのは、中学2年生のクラスでした。担任は、クラス作り

りに次の左の図のような工夫をされています。一つ、一つの取り組みがどのようなものか、紹介がありませんでしたのでわかりにくいかもしれません。特に②教員との信頼関係の「『セルフマネジメントプランナー』とは何か?」と思います。とかく、高槻の取り組みはユニークな面があって、名称から想像しても「???」ということがよくあります。

それはさておき、このような担任の取り組みによって、生徒がAL型授業で活発になった事例を森先生が紹介してく

<p>①生徒の主体性・協働性</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 班決め ● 考査作戦会議 ● 係決め ● 班活動 ● 文化祭 ● 夏の陣 (考査対策) ● バスの席決めレク ● 遠足 ● 予想問題集 ● 秋の陣 	<p>②教員との信頼関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ● セルフマネジメントプランナーのやり取り
	<p>③テーマ活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ホームレス問題 ● 平和維持活動
	<p>④キャリア活動+協働性</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 人生ゲーム

れました。

<事例①>

生徒Pは、1・2学期のときには、

- 顔を上に上げない ■ だるそうにしている ■ 授業中に発言なし ■ 内職 ■ 机の上に他の教科
- 冷めたイメージ ■ 遅刻気味 ■ 忘れ物多し

という状態であったのが、

◎セルフマネジメントプランナーの提出指導により教師とのコミュニケーションがなされ、

◎ 部活で活躍することで、居場所を確保し、

◎ 協働での生活改善週間対策を仲間との協働ですることにより、クラスメイトの承認を得た

その結果、3学期には、

- 授業中に積極的に発言 ● ノートもきちんととっている ● 内職なし ● 隣のクラスメイトの補助
- というように改善した。

<事例②>

生徒Qは、1・2学期のときには、

- 欠席が多い ■ 家庭環境に問題があり、教師からの様々な働きかけが必要な不登校傾向の生徒です。
- このような状態が、

◎セルフマネジメントプランナーの提出指導で「先生のコメントをもらうことが1日の楽しみの1つになりました」とコメントするようになり、

◎ サポーターの意図的かつ自然な設置で居場所の獲得

その結果、3学期には、

- ほぼ毎日出席 ● 明るい表情 ● グループワークに積極的に参加
- というように改善した。

森先生のまとめです。

- 進学校の生徒は「成績」という大きな評価軸を持つ。その評価軸を多様化するのが教師の大きな役割である。
- 多様な評価の中で、生徒たちは自分のポジションや居場所を見つける。
- クラスの中で承認されること＝居場所がある＝アクティブラーニングも活性化する
- 中高という思春期特有の心理に配慮するクラスづくりの重要性
⇒クラスづくり＝アクティブラーニングの活性化

言われてみれば、当たり前なことかもしれません。「相手に認められていない、居場所がない、」という状態では、不安で仕方ありません。そのような状態で、いくらALでグループワークをしても、活性化しないのは当たり前ですね。

しかし、あえて言われなければわからないこともあります。そういう意味で森先生の指摘は貴重な問題提起ですね。

【2】高槻の学修インタビュー

高槻中学校・高等学校では、年度末に「学修インタビュー」という企画を行っています。どんなものかというところ、生徒が三者懇談時に、担任・保護者を前にして、自分が1年間に学んだことをプレゼンするというものです。その実施要綱が手に入りましたので、一部紹介します。まず、内容です。

（内容）

- a.生徒が主体となり、学んだ内容や習熟度、努力したこと、目標などをプレゼンする。
- b.担任はサポート役として適宜生徒の説明を補足する。
- c.担任・保護者が説明内容について質問し、生徒が答える。
- d.担任が、今後に向けてのアドバイスを送る。（目安として、生徒7割、担任2割、保護者1割ほどの割合で、生徒自身が話の中心となるよう留意・事前指導する）



左の写真のように、担任・保護者を前にして、自分の1年間の学びや学校生活、家庭生活について、生徒自らが発表をしています。このときの担任の留意点として次のようなことが実施要綱に書かれています。

（留意点）

・現状認識、課題発見、問題解決、主体的な学びにつながるよう、教科学習の成果だけではなく、「学び」につながる教育活動全般について考察し、生徒自身の学ぶ力や意欲の伸長を促す。

- ・担任は、ポジティブ・フィードバックを心掛け、生徒の自己効力感や自己有用感を養い、ひいては自己肯定感を高めるよう助言する。
- ・担任が保護者に質問することも可だが、担任が生徒に、保護者が生徒に質問するように面談を進め、主体が生徒にあることに留意して進行する。
- ・生徒だけでなく、保護者に事前メモ（面談で相談したいことのリスト等）を提出してもらうことも可。
- ・高校課程においては、より具体的で顕著なエビデンス（学修や研究の成果、経験を証明できるもの）が提示できるよう指導していく。

※生徒との面談は、一人ひとりの発達段階を考慮し、それに応じて生徒の成長を支援・促進するために行うこと。また、親子関係、保護者の要望にも配慮すること。

おどろいたことは、この発表についてもルーブリック評価があるということです。それがこれです。

	観点	評価基準(自己評価する際の具体的な判断基準)			
		S	A	B	C
学習	理解度・到達度	・各教科の授業の内容を完璧に理解し、学んだ知識や技能をしっかりと習得できた ・相対的な評価指標(学年順位や偏差値)において、自分の目標以上の成績をおさめた	・各教科の授業の内容を理解し、学んだ知識や技能を習得できた ・相対的な評価指標(学年順位や偏差値)において、自分の目標と同程度の成績をおさめた	・各教科の授業の内容をほぼ理解し、学んだ知識や技能をほぼ習得できた ・相対的な評価指標(学年順位や偏差値)において、自分の目標におよばなかった	・授業の内容を理解できていない教科があり、知識や技能をあまり高めることができなかった ・相対的な評価指標(学年順位や偏差値)で目標をたてられず、成績も満足できるものではなかった
	授業態度・姿勢	・先生の説明や問い、級友の意見をしっかりと聴きながら、常に自分に引きつけて理解や思考を深め、主体的・積極的に自分の意見を表現できた ・分からないことだけでなく、学問的な興味と関心に基いた質問ができた	・先生の説明や問い、級友の意見をしっかりと聴きながら、理解や思考を深め、自分の意見を表現できた ・分からないこと、知りたいことを質問できた	・先生の説明や問い、級友の意見を聴いて、理解しようとする努力、指名された時は自分の意見を発表した ・分からないところがあれば質問できた	・先生の説明や問い、級友の意見を聴けないときや集中できないことがあったり、授業を受ける姿勢が受け身であったりした ・分からないところをそのままにしていた
	家庭学習	・与えられた宿題・課題は必ずやり遂げ、それ以上の学習にも取り組めた ・質と量(時間)ともに十分な家庭学習ができた	・指示された宿題・課題を着実にこなした ・しっかりと家庭学習に取り組めた(目安:平日2時間、休日3時間)	・指示された宿題・課題が概ねできた ・家庭学習の習慣がついている	・宿題・課題ができていないことがあった ・家庭学習が不十分であった
生活	学校での生活習慣・態度	・何事にも積極的に取り組み、正しく判断して行動することができた ・学校において、積極的に良好なコミュニケーションをとることができた	・主体的に物事に取り組み、正しく判断して行動することができた ・学校において、良好なコミュニケーションをとることができた	・規則や指示を守った生活が送れ、そつなく行動することができた ・学校において、常識的なコミュニケーションをとることができた	・生活習慣が乱れたり、だらしない行動をとったりすることがあった ・学校において、あまりよいコミュニケーションがとれなかった
	家庭での生活習慣・態度	・自主的自律的に規則正しい生活を送り、正しく判断して行動することができた ・家庭において、積極的に良好なコミュニケーションをとることができた ・家庭の一員としての役割(手伝いなど)をこなすことができた	・規則正しい生活を送り、正しく判断して行動することができた ・家庭において、良好なコミュニケーションをとることができた ・家庭の一員としての役割(手伝いなど)を果たすことができた	・概ね規則正しい生活が送れ、そつなく行動することができた ・家庭において、常識的なコミュニケーションをとることができた ・家庭の一員としての役割(手伝いなど)を果たすことがあまりできなかった	・生活習慣が乱れたり、だらしない行動をとったりすることがあった ・家庭において、あまりよいコミュニケーションがとれなかった ・家庭の一員としての役割(手伝いなど)を果たすことができなかった
課外活動	部活動・校内の活動(授業以外)	・練習や活動に熱心に参加できた ・他者との協働を通じて、多様な他者を尊重し連帯することの大切さを理解することができた ・自分自身あるいは所属集団の進歩・成長につながる主体的な活動ができた ・練習や活動を通してすぐれた成果を残すことができた	・練習や活動に積極的に参加できた ・他者との協働を通じて、多様な他者を尊重し連帯することの大切さを理解することができた ・自分自身あるいは所属集団の進歩・成長を意識しながら取り組めた ・練習や活動を通して具体的な成果を残すことができた	・練習や活動に概ね参加できた ・他者との協働を通じて、他者との関わりの中で生活していることを学んだ ・自分自身あるいは所属集団の進歩・成長を結果として感じる事ができた ・練習や活動を通して得たことがある	・練習や活動に積極的に参加できなかった ・協働的な活動や、多様な他者と交流する活動にあまり参加することができなかった ・自分自身あるいは所属集団の進歩・成長を意識して取り組めなかった ・練習や活動を通して得たことを説明できない
	ボランティア活動・校外の活動	・奉仕活動や社会との関わりの中で、社会貢献意識を強く高めることができた ・自分自身のさらなる成長のために努力・研鑽を積み重ね、すぐれた成果を残すことができた	・奉仕活動や社会との関わりの中で、社会貢献意識を高めることができた ・自分自身のさらなる成長のために努力・研鑽を積み重ね、具体的な成果を残すことができた	・奉仕活動や社会との関わりの中で、社会貢献意識を持つことができた ・自分自身のさらなる成長のために取り組んだ活動を通して得たものがある	・奉仕活動や社会との関わりを意識できる活動に参加することができなかった ・自分自身のさらなる成長のために取り組んだ活動を通して得たものを説明できない

小さくてわかりにくいと思うので、詳しい資料が欲しい人は、私に言ってください。データで差し上げます。

この「学修インタビュー」の取り組み以外にも学習委員会活動、自由研究、コミュニケーション研修、など取り組みが行われています。全てに共通しているのが、その手法がALであるということです。つまり、

INPUT⇒CONFLICT⇒内化⇒外化⇒リフレクション

という形を取っていることです。学ぶ点は多々あります。

例えば、〇〇高校の三者懇談の場面はどうでしょう？誰が一番話をしていますか？おそらくNo.1は担任 No.2が保護者 No.3は生徒ですよね。三者懇談は生徒にとっては、「無事済んでほしい・・・早く終わって欲しい・・・何も言わないでほしい・・・」という時間ではないでしょうか？そして、科目選択の話を担任がしても、「・・・」が続いたり・・・。これでは、折角の時間が無駄になります。

三者懇談も少し工夫をしてみればどうでしょう？特に科目選択に関する懇談は、事前に考えるべき内容を生徒に伝えて、準備をさせておくのと良いでしょうね。それでも、話ができない生徒はいますので、何に悩んでいるのか、自分にとってのアンカー(絶対譲れない指標)は何か、優先順位は何か、など生徒の思考を促すワークシートを用意してあげると良いのではないかと思います。

進路行事はどうですか？進路別分野別講演会は実施しています。これは、「INPUT」です。生徒はワークシートに記入して、提出します。これも「OUTPUT」の一つですが、どちらかといえば、「提出するんだからちゃんと話を聞け」という指導で書かしている側面が強いですね。それよりも、クラスで同じ話を聞いたもの同士、グループで何の話があったのか、自分達はどのように思ったのか、これからどんなことをする必要のあるのか、どんな情報が必要かなどを話し合わせ、クラスでプレゼンテーションして、全体で情報を共有するというような取り組みは如何でしょう？そのほうが、「INPUT」が「聞きっぱなし」で終わらないと思うのです。

最後に、前号でも書きましたが、とにかく「高槻は、よく勉強し、よく研究している！」ということです。社会がどんどんイノベーションし、教育にもイノベーションが求められているわけですから、

私達もイノベーションしましょう！